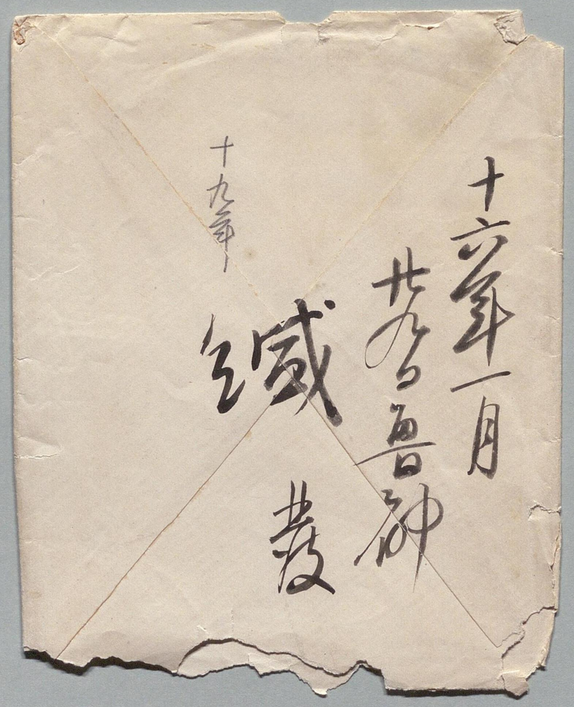
尾崎三良殿

親拜 私成

柳原前光

国立国会図書館　尾崎三良関係文書 106-93



十六年一月
芳香晋神
缄 發

十九年

国立国会図書館　尾崎三良関係文書 106-93

国立国会図書館　尾崎三良関係文書 106-93

及候ヘ未タ其建儀ニ之ニ沿フテ激烈ニ及ヒシ所以ノ者ハ
氏モ奉戴スル事ヲ好マス其故ハ帝室ヲ重シ
ス今日ノ政体ハ何年ノ今般ハ其目的ヲ大ニシ支那ヲ掃
ラス根本帝室家法即チ帝位継承ノ法皇位
帝位就任協定ノ制及律法以下帝室特権制
ニ度ハ儀式上独テ細目ニ至リ目録ヲ定メ随テ
慨ナサル様居ル方ハ此ノ如ク政府ニ於テ権
決式ハ帝室財産トカ或ハ財政ノ制トカ華族ノ制
トカノ家法モ有シ然モ其ノ原則ヲ大計ヲ図ル
時ハ皆帝室制度ノ一部分ニ過キス且一部ノミ
解リ之ヲ此処ニ於テ論スル事ハ差控ヘ中
ニ至リ迫ルノ有様ニテハ是等ノ事ハ甚タ困
難ナルヘシ依テ帝室ノ事ハ日本ノ作用
目的ノ精神ハ甚タ必要ニテ大成ナル方策ナリ
此等ニ至テハ一事ヲ為サンニハ之ニ依ルコト有ル
テ其君臨ノ皇室ナルモノ有リ所以ハ帝
室ノ権且ツ絶対ノ権利ハ影ニテ政府ニ在テ
重ヲ為スル者ヲ損シ国体ト帝室トヲ分離シ変
更セラルヽ為メ其ノ実ヲ施シ風俗ヲ擾乱シ

二

殺ヲ遂テ徳ヲ布クノ懐抱由ミテ即チ模範ハ歴代
仁君輩出シ妙ニ此事ニ熟セリコトハ更ニ多ク此故
智慧ヲ徹フベシ即チ更ニ一ツ曰ク神皇ノ所建築ノ
為ニ献金スル敢テ此ニ世界ニ近シトシテ大建築
善ヲ手ニ当リ献金セシハ当級ヨリシテ宜シク褒賞ノ
スル曲ヲ折リ如キ是也匹夫ダモ強ク居ルハ除リ今
本ノ国ヲ以テ財ヲ志ノ献金セシ者ハ独リ政ニ
事ト見テ是ニ便ニ一端リ協スル者ニテ協意ヲ思ヒ
本キ人心ヲ打チ新ナルニ思ヒサラシム術即チ我ガ習
作用ヤ次ニ精神トハ[illegible]立ニテハ甚ダ

危キ所ヲ保チ傾ケ倒ツ所ヲ再ビ起スハ皇族ノ聖華族ノ又
有徳動ノ者ニ申直ヨリシテ朝廷ニ奉ジ輔弼
セシメ且陛下ノ御ヲ採ニテ自ラ政ヲ制シ創始
陛下ハ上ヨリ親シク統括シ中外ヲ統ブル時
ニ方リ甘シテ死服スルニ畏レムベシ此力アル時ハ　王室帝
ニ実権ヲ失セズ且ツ時ニ権ヤ弁説ヤ
是即チ王室ノ千歳ヲ保ツ訳ニテ我ガ所謂精神ヤ
於テ保蔵作用精神ノ三ノ危機ニシテ居ル帝室
ノ基ヲ併セテ以テ下ヲ萬世ニ垂レニ此ノ大根本ナキ
者ハ帝室ノ臨時ヲ煩スルニ足ラズト甚ダ難シ

国立国会図書館　尾崎三良関係文書 106-93

既ニ宮内ノ筆記ハ所載ダモ書ノ例ハ又焉ヲ作用又
精神ニ於テ遅アランヤ 君等準備ノ大業ニ於テ
悔スレハ帝室ノ制度確立モ其一ヤ而シテ帝室ノ
制度ニ付テ悔スレハ如何ニ所載作用精神ノ違ヲ
整理スルニアリ 具筆ニ帝室ノ制度ノ違ヲ 宮内ノ実行
ニ於テ又修正モアルヘキ所見ニ 敢少クモ四五年ハ覚
シ 事ニ於テ然ルニ君等ノ所見中六年ナレハ十分
無体ニ以テ如何ニ君等ノ具体ニ論ナラハ此帝室ノ論
是ニ以下ノ如何ニ結ト云ヒ 毛沢ニ難ク然シ不適
直チニ可及建議ニ於テ 相ニ議ニ 年年位取用

限如何ニ又六月ニ八月ニ 御祖宮ノ所有ノ事
違ニアラハ帝室ノ体ニ君等ニ 聖慮ニ
於テ一所ニ如何ニ 御遇スルハ 宮内ノ客時
ハ断然ニ 聖冠退所ニ 結ニ其ノ事ニ 異常
君等如何ニ於テ 居ニ難ク 問 口ニ中間ニ 満ル
ノ注意ニ 與ヘ記スルハ 官家ノ事ニ 君等
力ニ自然ニ於テ 主ニ於テ 諒察ニ 人ニ 君等ニ 不悉
十六年一月廿七日 晋神
尾崎三良 柳原前光